〈書　評〉

『経済倫理＝あなたは，なに主義？』

経済学会・編集委員会

大学院主催の合評会で討論者になった3人に呼びかけ，書評を書いて頂くことになった。それぞれ経済思想，政治思想，社会学　の専門家である。書評対象は次である。

橋本　努『経済倫理＝あなたは，なに主義？』講談社選書メチエ
2008.8　ISBN 978-4-06-258419-7　1600円（税別）

第1部　経済思想の立場から

小　峯　　敦

第1節　はじめに

新しいタイプの本である。講談社メチエという選書としては，例外的に売れ行きも良いらしい[1)]。2008年8月の発売以来，1ヶ月もたたない内に重版になった。「日本経済新聞」や『週刊ダイヤモンド』でも書評された。手にとってみると，実際に読みやすい。読者参加型の仕掛けが施されている[2)]から，すいすいと，気楽に，楽しんで読める。しかし熟読しようとすると，とたんに読みにくくなる。つっかえる箇所が多くなる。疑問，そして新しい発想がいくつも湧いてくる。つまり，本書は門外漢の本好きにも，議論好きの専門家にも，同時に満足（あるいは不満足？）を与える話題本なのだ。

以下では，経済思想を専攻する立場から，本書を好意的に紹介しつつ，若干の論評を付け加えることにしたい。この書評は次のように構成される。第2節は今までの「経済倫理」本について，歴史的に概観する。第3節は本書の構成・内容を簡単に紹介する。第4節は筆者の基本的姿勢を明らかにする。第5節は第1章における4つの経済問題に絞り，コメントを加える。第6節はその他の論点（主に用語法）を3つほど指摘する。第7節は合評会における学生の感想を抜粋して紹介したい。第8節は結語とする。

---

1)　平井（2008：103）。この書評子は書店勤務である。
2)　「雑誌の相性占いのような体裁をとっているが」（間宮 2008）。

第2節 従来の「経済倫理」本

さて，「経済倫理」と銘打つ入門書である。この書評ではまず，今までのトレンドを抑えておく必要があるだろう。ビジネスや経済に関する倫理（学）については，最近，静かなブームになっているように見える。営利企業の倫理性，経済全体の倫理性という二分を施し，それぞれ代表的な著作・論文を取り上げておこう。

第1に，営利企業の倫理という文脈である。古くは1920年代のアメリカで，ビジネス倫理という概念が流行した。「自由放任とも政府規制とも異なる，業界団体」による「倫理」という名の「社会的コントロール」（佐藤 2005：102）が問われていたのだった。1970年代は公害や石油危機を背景に，「企業の社会的責任論」が高まった。しかしそれは学界を巻き込んだ潮流とはならなかった（田中 2004：12）。1980年代中葉からは，バブル時代の金余り現象から，企業メセナ・企業フィランソロピーが戦略としても盛んになった。バブル崩壊後は「持続可能な社会」というスローガンのもと，CSR（Corporate Social Responsibility）という標語が完全に定着した。企業活動そのものに倫理性を求める時代的要請が強まったためであろう。この現実を背景に日本経営倫理学会が設立され（1993年），学問上も転換期を迎えた[3]。また加藤尚武らの尽力で応用倫理学が発展したが，その一分野としてビジネス・企業・経営に関する倫理学を確立する動きが強まった。川本編（2005）や加藤ほか編（2008）はその成果である。

この潮流を背景に，いくつかの入門書も出現している。梅津（2002）と田中・柘植編（2002）を代表例としてあげておこう。前者は利潤・業績の高低で測られる「ビジネスの価値基準」と，人間の行為における善悪を扱う「倫理の価値基準」を交差させて得られる四象限を考察する分野として，ビジネス倫理を捉える。ビジネスとは企業経営・本務・金儲けといった多様性を含む用語である。この分野で理論・制度・実践の三側面を考えようとしている（梅津 2002：3-8）。後者は哲学・倫理学に基礎づけて，ビジネス（営利・非営利の労働）をめぐる諸問題に迫ろうとする。応用倫理学の興隆でわかるように，道徳を哲学するだけでなく，近年は実践可能な倫理への要求が高まった。ビジネス倫理学は「企業が道徳的な主体になりうるか」という根元的な問いも秘めながら[4]，ビジネス活動をとりまく社会的・経済的条件も検討される（田中 2004：20）。いずれも企業を中心とした倫理の理論と実践が問題となっている。

第2に，ビジネスから経済へ拡大する展開である。柘植（2004：54）はビジネスという言葉を経営・企業のみならず，仕事・職業・商売・商業を含むもっとも広い意味で用いた[5]。そして人間の良（善）き生という観点（倫理学の究極目標）からビジネスを評価することに主眼が置かれた。倫理学の中で，ビジネス・経済をどう扱うかが問題だったのである。実際，この論考ではス

3) 佐藤（2009：序章）によれば，海外では専門的学術雑誌の創刊は1980年代初頭であった。

4) 生命倫理学では自己決定権，環境倫理学では未来世代の権利，動物の権利など，これまでの規範倫理学が当然視していた〈人間中心の倫理〉に見直しがある（田中 2004：23）。

5) マーシャルの経済学定義にビジネスという単語が入っていることは注目されて良い。経済学は「ごく普通の日々の業務 ordinary business of life を行っている人間に関する研究」である。橋本（2006：11）を参照。

ミスと J. S. ミルが挙がっていた。柘植ほか（2007：1）においてはビジネスという言葉も避けられ，市場や経済制度まで広げた「経済倫理」が俎上に載った。そして「市場と倫理」「経済と人間」「経済学と倫理学」というテーマが議論されている。それは応用倫理学の一分野というよりは，学際的な性格を持つ。経済学史学会の全国大会（2008.5.24，愛媛大学）では，「経済思想とビジネス・エシックス」というセッションが開かれ，多くの聴衆の前で活発な議論が行われた（評者が司会）。ビジネスという用語すら飛び越えて，経済へと拡大する傾向は佐藤（2009）に最もよく窺える。そこではビジネスと倫理を結ぶ思考に関して，当然視と無視という極論から離れ，いかに／なぜ　両者を連続的に結ぶのかという経済思想史的な関心がある。

もちろん経済（学）にも倫理を扱う分野はあった。それは経済思想と経済哲学である。前者は経済思想史では特に顕著で，ソロン，アリストテレス，聖書の太古から，トマス・アクイナスの中世を経て，マンデヴィル，ハチソン，ヒューム，スミスと渡ってくる歴史そのものである。19世紀では J. S. ミル，マーシャル，20世紀ではヴェブレン，ナイト，ポランニーが特に深甚な議論を重ねてきた。これらは歴史的記述・再構成として充分に意味がある[6]。後者は現代的な分析的枠組みを用意した新傾向である。21世紀の日本では特に，山脇（2002）と塩野谷（2002）を挙げておく必要があるだろう。両者は共同体（徳）を重視する功利主義批判であり，経済と倫理をめぐる諸問題を包括する分析的枠組みを用意している。前者では経済学という言葉に，「財をめぐる行為に関する人と人との関係」という倫理の問題が既に埋め込まれているとみなし（山脇 2002：iii），ベンサム的功利主義からの訣別を宣言する（ibid.: 56）。その上で，義務論・徳・公共財という3つの観点から経済倫理を捉え[7]（ibid.: 68-69），公／私に公共を加えた三元的世界を考察した（ibid.: 70）。後者は倫理学における道徳判断の対象を，個人的行為・社会的制度・人間の存在の3つに分類した。それぞれ価値基準は善・正・徳である（塩野谷 2002：21）。その上で公共精神と社会的連帯を確立する必要があると説いた（ibid.: 380）。いずれもアリストテレス的な卓越する知・徳が理想となった。

以上の概観からもわかるように，近年では経営学や応用倫理学の一分野として，そして経済思想・経済哲学の領域からも，広義のビジネス（経済）と倫理に関して，多くの言説が揃いつつある状況である。

第3節　本書の概要

こうした近年の「経済倫理」本に対する本書の特徴を述べる前に，その前半分に比重を掛けながら，本書の概要を記しておこう。

表1　目　　次

第1章　一貫した経済理論の立場を形成してみよう

6)　その1つであるコスロフスキー（1996）は筆者（橋本）による翻訳である。

7)　塩野谷（2000：109）は経済倫理を「人々のよい生活 well-being を実現するために経済活動を規制する社会的規範の原理」と定義した。

第2章　イデオロギーの立場を分類してみよう
第3章　最近の経済倫理問題について考えよう
第4章　「市場の倫理」と「統治の倫理」
第5章　政治経済の羅針盤――あなたは「右」？　それとも「左」？
第6章　価値論マップを作ってみよう

本書は大きく前半の3章と後半の3章に分かれる。前半の3章はイデオロギーとして現れた「経済と倫理の関係」を直接的に扱う。第4章と第5章ではここに政治領域を含めたイデオロギーの区分を扱う。最後の第6章はやや趣を異にして，イデオロギーの背後にある価値観の抽出を，政治心理学の助けを借りて行う。なお筆者は本書ではイデオロギーという言葉を説明していないが，思想的傾向，素朴な先入観，政治的態度などと言い換え可能であろう[8]。イデオロギーの背後に「価値観」があると言明されており，その「価値観」は何が望ましいかを判断する際の基礎を与える傾性（苗床）と定義された（214，書評対象本からはページ数のみで表記）。

第1章は本書のコアであり，4つの経済倫理の問題が提示される（25）。(1) 利益か道徳か。(2) 公正か安定・秩序か。(3) 自由な関係性か人為的なリベラルか。(4) 包摂主義か非包摂主義か。読者はこの4つに関してそれぞれ二者択一（X か Y か）で選択を迫られ，16通りにパターン化される。そのうち8通りにまず名称が与えられる。XYXY ならば新自由主義（ネオリベ），YYXX ならば国家型コミュニタリアニズム，XXYX ならばマルクス主義／啓蒙主義(1)という具合に。それぞれの問いに際して，具体的で現実的な経済上の係争問題が挙がっており，読者はさほど困難を感じることなく，むしろ楽しんで，自分が持つイデオロギーを発見する[9]。

第2章はそのように分類された8つの型について詳しく解説されると同時に，名前の無かった残りのうち，6つの型が新たに命名される（98）。これらはこれから分析すべき新たな潮流とされる。第3章は上記4番目の二者択一を再考し，包摂と非包摂をさらに各々二分することで，企業家の行動以外の分類を可能にしようと分析される。包摂主義は祭司型と主体化型に，非包摂主義はヒューマニズム型とサバイバル型に分かれる（121）。

第4章はジェイコブスの近著『市場の倫理　統治の倫理』（原著1994／翻訳1998）に触発されながら，その議論の不十分さを克服する分析を行う。ジェイコブスは市場／統治という二分法を使い，それぞれの倫理が民間企業／政府の二分法に対応する，そして両者を峻別すべきと主張した。筆者はこの二分法が荒すぎると批判し，それぞれさらに三分割することを試みる。市場の倫理は，行政・生活者・企業家の倫理に。統治の倫理は，封建的共同体・貴族的精神・ポスト近代文化に。このように細分化すると，ジェイコブスの二分法は不可能で，むしろ両者の倫理は分かちがたく結びついているとわかる。それゆえ場面に応じて，それぞれの倫理に含まれる要素をう

8)　シュンペーターによれば，イデオロギーとは「人が見ていると考えるものの誠実な言明」である。この表層に対して，深層は世界観 vision という用語が与えられた。この議論は塩野谷（1995：68-71）に詳しい。
9)　私は YXYY のリベラリズム（福祉国家型）に分類された。

まく混ぜれば，すぐれた社会が構想される（183），と論じられた。

第5章ではイデオロギーは右か左かという二分法に対して，異議が唱えられる。その代わり，政治の領域と経済の領域で，自由に関する度合いに応じて，四象限でイデオロギーを区分しようと試みられる。24の問いに答えることで自由度が算出される（202）。政治的自由度がマイナス，経済的自由度がマイナスの場合は共同体主義，同プラス・同マイナスの場合は福祉国家型リベラリズム，同プラス・同プラスの場合はリバタリアニズム，同マイナス・同プラスの場合は保守主義と分類される[10]。

第6章はシュヴァルツとイングルハートという2人の政治心理学者の知見を紹介し，彼らのアンケートを拡張・改良する。そして表層であるイデオロギーの背後にある安定的な価値観を抽出する。下部構造（経済）と上部構造（文化・精神）の関係性も問われる。イデオロギーが一貫していなくても，文化的な価値観が一貫しているのではないか，という疑問から出発している。イデオロギーあるいは価値観は何に規定されるのか，これからもさらなる分析が必要であるとして本書が結ばれる。

第4節　筆者の基本的立場

経済思想の研究者（つまり私）は因果な商売である。本書のような「他の人の経済思想の立ち位置を鋭く暴く」とする入門書に対しても，「それではそれを書いている筆者の立ち位置は何か」とさらに応戦する傾向にある。つまりメタ認識に対して，さらにメタ・メタ認識で対抗しようと無意識に考える。それが成功しているかどうか別として，このような観点から，本書を出版した筆者の基本的立場を推測してみよう。

筆者は民主主義的な討議・熟議 deliberation を，イデオロギーの自覚を通じて，若い読者に実践させることを強い動機としている。「自分の主義主張を言語化してみよう」（7），経済倫理の様々な型を深く考え，自分なりの一貫した立場を築き，人々を説得していく（13），「どんな社会が善いのかについて，展望や構想をもちたい」（13），「私たちは自己の考えを相対化し，境遇の異なる他者との共存関係を探る」（22），企業家は淘汰されうるが，政府や従業員や消費者は「淘汰されず，存続していかなければならない」（116），「当事者観点から自分の利害を感情的に表現」していくのは「まずいのだ」（147），「民主的な議論の成熟を放棄」してはいけない（148），「さまざまな試行錯誤のなかで，自分の価値観を形成していくこと」が教養（250），納得できないが理解はできるというレベルから，相手の一貫した説明力を認めるという段階を踏む（254），批判とコミットメント（関与）の往復が必要（257），という具合である。つまり教育に関しては，介入主義的な paternalistic 温情主義が見られる。この背景には若者（学生）のみならず日本人全般的に，ある事象についてあまりに情動的であり，またその情動に政治が大きく動かされ，長期的・多角的な検討を経ないまま，本物の政策として実現してしまうことへの危機感がある。本

10)　ちなみに私は政治的自由度（14－(－15)）＝29，経済的自由度（2-8）＝－6 となり，これも福祉国家型リベラリズムに分類された。

書では触れられていないが，具体的には小泉政権における郵政民営化，最近の刑法上厳罰主義――成人年齢引き下げや死刑存続の問題――，拉致問題などにおける世論であろう。一例を挙げれば，圧倒的多数の国民が郵政民営化をその時は支持したわけだが，いざ実際に民営化した場合に，何が利点で何が欠点かを検証する視野が欠けている。建築物や食品における偽装問題も，のど元すぎれば視野から消えてしまう。こうした状態に大きな危機感を持っているのが筆者の立場ではないか。そしてこの立場は私と共有する。

もう1つの前提は倫理の性格付けに関してである。筆者は人々が倫理に関して一貫した立場を持つのが好ましいと判断するが，他方，その立場はそれぞれ異なってよい（異なるべきだ）という立場を持っている。「一貫した」という表現を筆者は何度も使っているが，それは合理的とか厳密性という意味というよりは，自分でその理由を説明できるというぐらいの意味であろう。また経済問題を考える際には，今までは共同体主義の徳目重視という立場が最も「倫理的」であると見なしがちであった。しかし筆者はそうではないと言う（12）。リバタリアンもネオ・リベラリズムも倫理について重要な考え方を示している。倫理の基準はイデオロギーの数だけ存在する，ということである。つまり道徳――人々が究極的に守るべき絶対性の帯びた規範――に焦点を当てるというよりは，倫理――ある条件が与えられた場合の，人々の振る舞い方――を問題にしているのだ。

ゆえに本書での「倫理」という用語は次のように使われている。自分がどう振る舞うかではなく，企業・国家や多くの人々が社会の中でどのように振る舞うべきかについての判断である（26）。つまり信条（他人とは関係なく，自分がどのように行為するか）とは異なる。また願望（社会が倫理的に望ましい方向に自生的に進んで欲しいという気持ち）でもない（58）。本書での方法は，ミクロ的アプローチではなく，マクロ的アプローチに近い。前者は個々の経済主体の道徳性を問題にしており，後者は経済体制そのものの倫理を問うことになる（川本 2005：15）。

筆者は経済学のよくある思考法にも異議を出している。一般に経済学は「何が善い社会であるか」という一次的・根元的な問いを不問に付し，「経済成長」「安定」「公正」「厚生」といった二次的・副次的な価値を追求することに専念する。しかし筆者によれば，経済倫理学はまったく異なる発想をする。この二次的価値をどのように追求することが望ましいのか，という問いを立てることで，必然的に善き社会に関する根元的な問いも避けることはできなくなる（111）。こうした立場は私も共有する。ただし経済倫理に限られず，経済思想（あるいは経済学史）一般にこうした接近方法が採られることを付け加えるのみである。またイデオロギーの問題は経済の問題と密接に関連しているのに，筆者によれば詳細に論じられたことはなかった（7）。さらに現代の経済学は価値自由だと信じられていて（単なる信念・信奉），それゆえイデオロギーを生理的に嫌ってきた。またイデオロギーを分析する者も経済を単なる営利と見なして，やはり嫌悪感を持っていた。再び，この部分も私は共感する。このような状態は，改善されるべきだろう。メタ経済学――経済学そのものに関する学問――が必要とされる所以である。

以上の考察から，第2節で示した「経済倫理」本と本書の違いが判明する。筆者の立場・意識

は徹底的に実践的である。情動に流される政治的な言説をいかに打破するか。それには特に若者を参加させ巻き込ませ，自らのイデオロギーを自覚させ，他人と討議させ，より良き社会を作るための礎としたい。その手段として時にあざとい工夫（星占い風アンケート）も必要であろう。この意味で，倫理学を社会的問題に解放するという応用倫理学の試みとも重なる。ただし経済（学）の内部から倫理に接近する方法が特徴である。もちろんこの方法も従来，3通りほど存在した。第1に，主流派経済学による倫理の完全無視・分離である。第2に，経済思想の研究者による過去へのまなざし――過去の経済学者の言説を再構成する――である。私自身の立場である。第3に，経済哲学の研究者による規範理論の構築である。筆者の基本的立場は，現在・未来の経済社会状況を直接に見据えるという点で，第2から離れる。また厳密な理論構成を目指していないという点で，第3ともやや異なる。もちろん共通する因子は多くあるが，本書が新しい試みであることは間違いない。筆者は経済倫理学という学問を構築しようとしている[11]のではなく，経済倫理という問題提起を行うことで，人々（特に若者）の言論行動・言語能力を揺さぶり，開発しようとしているのだ。本書がすぐれて実践的というのは，以上のような意味である。

第5節　4つの経済倫理問題

ここでは本書のコアである第1章の問題設定をやや詳しく解説し，若干のコメントを付けておこう。

第1の問いは，利益か道徳かである。この問題は最もストレートであり，簡潔だ。経済行為がいままでの道徳に制御されるべきか，あるいはそれとは独立に存在してよいか，さらには新しい規範を積極的に作るほど強力なのか，という問題設定である。道徳を重視する立場はカール・ポランニーにあり，経済は社会（道徳的規範）に埋め込まれている，という表現がある。利益（経済行為）を重視する立場は，フリードマンによる徹底的な経済の純化，およびシュンペーターの創造的破壊――既存の価値観を打ち壊す革新的企業家――に分かれる（31）。

経済思想の歴史を繙けば，この問題は経済学者が大いに取り上げてきた論題であった。アリストテレスやトマス・アクイナスまで遡らなくても，近代以降，経済学の勃興期には特に盛んであった。まずはマンデヴィルの問題提起と，ハチソンによる反論があった。マンデヴィルは私利私欲という個人的悪徳が，実は公益――社会を豊かにする――に直接つながるという逆説を説いた。ハチソンは仁愛という利他的な感覚・動機を重視し，これが自然に調和的な社会を導く原動力となると見なした。仁愛を感知できる「道徳感覚」moral sense（勢力 2007：393）によって，快を感じる本能が人間に備わっているのである。ヒュームによれば，商業文明は奢侈・インダストリ（産業活動）・知識・人間らしさを生む。近代以前の宗教的生活や軍事的生活ではなく，商業的生活において人間は古典的な徳に代わって，新しいマナー（洗練された技巧）を開発できた。スミスは二重の想定を施すことで，利己心と社会の両立を説いた。まず人間性では同感の原理に従い，公正な fair play の競争が行われ，次に市場では分業と資本蓄積が可能になっているよう

11）その一部は前著『帝国の条件』などで包括的に議論されている。

な競争条件（資本の自由な移動）も整っていた。このような市場と経済主体において，見えざる手のような調和的世界観が可能になっていたのである。しかしこうした勃興期の議論はその後，衰退していく。そして改めて本書のような新しい方式の問いが必要となってきたのだろう。

第2の問いは，公正か安定・成長かである。前者は原理としてのカント的な善であり，後者は秩序としての功利主義的な善である。個々の不正を見逃さない微視的な観点を強く意識するのが前者で，全体・総体としての安定という巨視的な視点が後者とも言えるだろう。動機（原理）を重視しているのか，帰結（手段）を肝要としているのかである。リバタリアニズム――本書の用語では自由尊重主義と訳される――は原理的な自由を求める（73)。「公正」という概念も多様な内容を含みうるが，本書では特に注記されていない。フェアな感覚というぐらいの意味であろうか。

第3の問いは，「自由な関係性」か「人為的なリベラル制」かである。この用語は理解しにくい。企業活動の優先性か――組織の掟のように，企業に共同体の側面を求める――，個人権利の尊重か――企業よりも高い価値＝別の共同体あり――の対立と捉えるべきだろうか。リベラルとは，ここでは自立した個人を前提として，人権尊重を重視することである（44)。内部告発の事例がわかりやすい。内部告発者を背徳者と見るのが前者，保護すべき奨励と見るのが後者となる。告発者が属している企業集団を秩序ある団体と見なすか，それとも企業よりも高次の価値がある共同体を指向するかという違いになる。

第4の問いは，包摂主義か非包摂主義かである。この用語もなかなか慣れない。昔は差別や平等と言っていたわけだが，現在は社会的排除，社会的包摂と言い表すことが多くなってきた。倫理の一翼を担う社会的存在として，企業活動も政府によって規制されるべきだ，という考えが「包摂」である。温情的介入主義か，自己責任主義かという違いになるだろう。経済活動を倫理的な側面から包摂（＝規制）するべきだろうか。

本書の議論に触発されて，経済と道徳の分離という観点から，ケインズの信条を取り上げておこう。ケインズの思想を取り上げる論点として，ケンブリッジ文化の前提を重視するか，ハーヴェイロードの前提を重視するかという問題設定がある。前者はケインズがケンブリッジ大学の学部生だった時に触れた思想であり，審美・愛智という私的生活を重視する生活態度である。後者はケインズが徐々に獲得していった公的な義務感である。換言すれば，具体的な政治的・経済的果実を求める社会改良主義である。ケインズは経済問題と道徳問題をとりあえず分離しているように見える。それは師マーシャルの態度と対比してみるとわかりやすい。マーシャルはむしろオックスフォードの理想主義が深層では覆い，労働者の人格陶冶や人間性の進化を社会的な進歩の要件と見なした。ここでは経済問題と倫理（道徳）問題が究極的には一致している。一種の包摂主義である。しかしケインズではむしろ分離されている。その理由は，精神世界と物質世界が二層構造をなしていて，後者が前者に圧倒的な影響力を与えるにしても，精神世界の優位性は揺るぎない独立した自律性を有しているからである。経済問題はそれ自体としては重要であるが，それは道徳・文明の経済的基盤を作るからである。ゆえに経済問題の中に道徳的要素をあえてシ

ンクロさせる必要はない。経済学者は歯医者のように有能であればよい，というケインズの言葉はこの文脈で理解されるべきだろう。

本書に対する最大の疑問は，この4つの問題を考察することが経済倫理を熟慮することになるかどうか，大きな枠組みからは説明されていない点である。なぜこの4つが選ばれたのか，4つで十分なのか重複しているのではないか，あるいはある主義主張は4つしか要素がないのか，という疑念である。評者も答えがないわけだが，経済倫理を十分に議論するためにはこれらの要素を考察することが必要で，しかも重複もないと説得されれば，なお良かったであろう。確かに混同しがちな隣接の主義を区分するのに，4つの問いは時に強力だった。例えば新保守主義（ネオコン）と新自由主義（ネオリベ）は，第1問の答えのみが異なる。すなわち道徳を重視するのが前者で，利益を重視するのが後者となる。非経済要素と経済要素のどちらを重視するかで両者が分かれていく。次に新自由主義とリバタリアニズムの違いは，第2問の答えのみにあった。リバタリアニズムはより原理原則主義なので，手段としての経済成長という発想はない。最後に新自由主義とリベラリズム（福祉国家型）は，第3問の答えのみが異なる。前者が営利企業を倫理的にも尊重すべき組織と見なしているのに対して，後者は企業が作ってきた既存の規範を打ち破ろうとする。このようにいくつかの主義に微妙な差がある，あるいは案外に近いという目安は可能になる。しかしそれぞれのXとYに多くの立場が含まれていて，どちらかを即決できないもどかしさも残った。対案がないのでこれをベースとせざるを得ないが，回答すべき問題群の必然性が説明されていれば，さらに説得的な議論になったのではないか。

第6節　断片的なコメント

その他の細かい論点を挙げておこう。

倫理という用語は，ここでは自分の信条ではなく，他人が守るべき規範を意味した。この定義がアンケートに答えにくい要因となっている。自分の規範を捨象した上で，他人の行為を観察する作業が必要だからである。ここでなぜ自分の信条＝道徳をストレートに出してはいけないのかという疑問が生じる。それの方が自分の主義主張がはっきりと直接的に回答できて，良かったのではないか。ただしこの困難性は筆者によって自覚されている。自己の倫理的指針と社会の倫理的要請は異なりうるとして，社会と個人が異型の場合は自己が引き裂かれるとされた。それに耐えられない場合は，社会と個人の同型へと変更しなくてはならない（110），と。

細かい点であるが，訳し方・略し方に違和感が残るものがあった。新保守主義（ネオコン），新自由主義（ネオリベ），リバタリアニズム（自由尊重主義），包摂主義，近代卓越主義などである。最初の2つはこのように略すと，バイヤスがかかるという例である。ネオ・コンサバティブ，ネオ・リベラリズムと表記すると，きちんとした思想の型のように見える。しかし四文字に略記すると，とたんに唾棄すべき悪の帝国のようなイメージが付いてしまう。またリバタリアニズムに関して，近年定着しつつあった訳は自由至上主義または自由放任主義であった。しかしここではあえて自由尊重主義と訳されている。自由至上主義という言い方は，どちらかと言えば批判的

に言及される場面を多く含んでいる。それを筆者は払拭したかったのだろうか。また包摂主義は今までの家父長的温情主義という用語では不都合なのだろうか。あるいは倫理優先主義という新語ではどうだろうか。最後に，近代卓越主義も卓越した徳というプラスのイメージがある。こうしたイメージが先行してしまい，学生のアンケートで述べられていたように，マイナスのイメージに分類されたならば失望し，プラスならば歓喜するということになりがちである。実際は4つの答えが合致しただけなのだから，上記の用語が持つ本来の複雑な内容を掬い取れていない可能性がある。それゆえ分類された主義主張は，できるだけ中立的な用語・新語の方が望ましいのではないか。

また新保守主義の対外政策も重要な論点であるが，本書では捨象された（69)。例えばブレア政権を総体として評価するためには，対内政策と対外政策の両輪を調べなくてはならない。この点を合評会当日にただしたところ，対外政策は前著『帝国の条件』で十分に考察したから，という答えであった。

第7節　学生の感想

合評会当日は88名の学生が参加してくれた。ほとんどは私が開講する「経済学史」あるいは「基礎演習 I」「演習 II」の学生であったようだ。特に「経済学史」では福祉・貧困というキーワードを講義概要の中に含めていたので，ランダムに選ばれた学生ではないことを断っておかなければならない。ただし授業は1回行っただけの段階であったので，授業によるすり込みはなかったであろう。出席者のアンケートでどのように分類されたかは表2にある。やはりリベラリズムが31名で多数派であった。次は共和主義，近代卓越主義，新自由主義が10名以上で拮抗していた。その他にも耽美的破壊主義，平等主義，新保守主義などに複数の回答が集まった。以下では，その感想を抜粋しておこう。

表2　学生の分類

リベラリズム（福祉国家型）	31
共和主義	13
近代卓越主義	12
新自由主義（ネオリベ）	10
耽美的破壊主義／支配者嫌悪主義	7
平等主義／啓蒙主義（2）	6
新保守主義（ネオコン）	4
リバタリアニズム（自由尊重主義）	2
地域型コミュニタリアニズム	1
YXYX	1
分からなかった	1
合　　計	88

「聞く側にもより深く参加できた」（２年，リベラリズム），「いろいろな分野の人たちが集まって話をすると，様々な考えが出てくるのは当たり前ではありますけれど，楽しかったです」（２年，リベラリズム），「新たな自分を発見できるので，とてもおもしろいアンケートだと感じた」（２年，リベラリズム），「今回この話を聞いて，より経済の奥の深さがうかがえた」（２年，リベラリズム），「50年前から現代に向かうまでの若者の主義の変化は，何が原因なのでしょうか」（３年，リベラリズム），「右翼，左翼，リベラルの３つの分類しか無いと思っていたため，このように細かく分類されているのだと知り驚きました」（２年，リベラリズム），「１つの問題にもいくつかの意見があり，それぞれ違った見解が聞けてよかったです」（３年，リベラリズム），「どんな主義であったとしても，それは胸をはれることであると思った」（３年，共和主義），「雑誌などでも心理テスト風に「あなたは○○タイプ」とかはありますが，このように経済的なタイプ（主義）というのを知ることができるのはとてもおもしろいと思いました」（２年，共和主義），「自分の思想や考え方は一体どのようなものかをはっきり分かるのは，本当にとても嬉しいです」（２年，近代卓越主義），「僕はダンスをやっていて常にオリジナリティを求めるのですが，今回少数派の分類に分けられていて少しうれしかったです」（２年，近代卓越主義），「それぞれの主義を選んだ人達の割合も気になるけど，その人達の主観的な考えと客観的な考えが同じなのか，それとも異なるのかというところも気になった」（２年，近代卓越主義），「個人的にはもう少し左より，あるいは大きな国家な分類になるかと思っていたので，意外でした」（３年，新自由主義），「教授の人達が討論しあうのは，ただの授業を受けるのとは別な新鮮な感じだった。経済社会を研究している人達が，それぞれの意見を言うのを聞ける機会が今までなかったからである」（３年，新保守主義），「４つの質問だけでは自分が何主義かわからなかった。……もっと多く分類された質問から，明確な主義主張を見いだしたかった」（３年）。

学生の感想からは，総じて経済問題はむずかしいが，このようなスタイル（アンケートや討論会形式）の新鮮さを感じたようである。自分の主義がわかって嬉しいという者。少数派／多数派で嬉しい者，逆に失望した者，あるいはどちらつかずで悩んだという者。このようなイメージが浮かび上がってくる。

第８節　おわりに

門外漢にも楽しめる。専門家にも考えさせる。一読はしやすい。精読はむずかしい。このように本書は相反した性格を持っている。容易さや楽しさは，血液型や星座に関する雑誌占いに通ずる。いくつかの簡単なアンケートで，「本当の自分が発見できる」のだ。自分探しと分類好きという現代の流行に，本書はうまく乗っている。ただし難しさや論争的な点は，その先の練られた知に基づいている。一見軽めの装いと異なり，既存のビジネス（経済）倫理とは指向性の異なる知の体系が詰まっている。自分探しの仕掛けを施すことで，イデオロギーと経済の関係という難解なテーマに誘う入門書である。経済（ビジネス）や倫理に興味がある人は，専門家でも門外漢でも，まずは手にとってアンケートに答えてみるのがよかろう。

参 考 文 献

梅津光弘（2002）『ビジネスの倫理学』丸善株式会社。
加藤尚武ほか編（2008）『応用倫理学事典』丸善。
関西大学経済・政治研究所ビジネス・エシックス研究班編（2006）『ビジネス・エシックスの諸相と課題』（研究双書　第142冊）関西大学経済・政治研究所。
関西大学経済・政治研究所ビジネス・エシックス研究班編（2008）『ビジネス・エシックスの新展開』（研究双書　第147冊）関西大学経済・政治研究所。
川本隆史編（2005）『岩波　応用倫理学講義　4 経済』岩波書店。
コフロフスキー（1996）『資本主義の倫理』鬼塚・橋本ほか訳，新世社。
佐藤方宣（2005）「1920年代アメリカの“ビジネス・エシックス”――「倫理コード」をめぐる動向とその同時代評価――」，『経済学史研究』（経済学史学会），47(2)，92-107，2005年12月。
佐藤方宣編（2009）『ビジネス倫理の論じ方』ナカニシヤ出版。
塩野谷祐一（1995）『シュンペーター的思考――総合的社会科学の構想――』東洋経済新報社。
塩野谷祐一（2000）「経済倫理」，経済学史学会編（2000）『経済思想史辞典』所収，109。
塩野谷祐一（2002）『経済と倫理――福祉国家の哲学――』東京大学出版会。
勢力尚雄（2007）「道徳感覚学派」，日本イギリス哲学会編（2007）『イギリス哲学・思想事典』研究社，所収，393-395。
柘植尚則（2004）「倫理学はビジネスをどのように見てきたか」32-58，田中朋弘・柘植尚則編（2004）『ビジネス倫理学――哲学的アプローチ――』ナカニシヤ出版。
柘植尚則ほか（2007）『経済倫理のフロンティア』ナカニシヤ出版。
橋本昭一（2006）「ビジネス・エシックスの諸相」，関西大学経済・政治研究所（2006）所収，1-40。
平井直子（2008）「書評：『経済倫理＝あなたは，なに主義？』，経済思想を自己分析するという逆転の発想で売れ行き好調」『週刊ダイヤモンド』，2008年９月27日号，103ページ。
間宮陽介（2008）「書評：『経済倫理＝あなたは，なに主義？』，二択の配列から探る立ち位置」「日本経済新聞」，2008年９月23日，23面。
山脇直司（2002）『経済の倫理学』丸善株式会社。

第２部　政治思想の立場から

篠 原 雅 武

冷戦の終焉とともに世界は一つになったといわれるが，はたしてそうか？　たしかに，資本主義と共産主義との対立は，資本主義諸国の勝利によって止揚されたかのようにみえる。リベラリズムと議会主義という資本主義に依拠する価値観が全地球的に支配するための物質的な条件が整備されたというわけだが，じっさいの歴史の過程をざっとでも振り返ってみればわかるように，価値観の対立はなくなったわけではないし，それをめぐっての議論も盛んになっている。新自由主義の実践下で推進される民営化（私有化）の是非をめぐる対立，フォーディズムの解体にともなう日常生活の不安定化／貧困の激化の是非をめぐる対立，イスラム諸国と欧米諸国とのあいだ

での宗教をめぐる対立，そして，ナショナリズムの擡頭や歴史修正主義をめぐる対立といったものだ。

こういった対立状況は，かつての二項対立図式では把握しきれない，複雑な状況であり，そこにおいて，どのような信条を持つのかと問われても，なかなかに答えにくい。保守か革新か，右か左か，自立か従属かというわかりやすい構図が失効しているからだ。たとえば，新自由主義の実践が，自由放任か，それとも管理／計画かという対立図式では捉えにくいことは，デイヴィッド・ハーヴェイの『新自由主義』などで詳述されている。新自由主義は，市場の自由は容認するが，だからといってそれを阻止するさまざまな実践は軍や警察の力で弾圧していく。市場原理主義と国家の暴力が同時に発動されるということだ。国家をそのまま擁護すれば新自由主義グローバリゼーションに対抗可能ということにはならない。

こういった複雑な対立構造をしっかりと説明してくれる本は，近ごろの本屋では目立つところに置かれていない。この状況下でいかなる価値観を持つべきかを説明してくれる本となるとさらにみつからないだろう。そういう意味では，本書『経済倫理＝あなたはなに主義？』のような本は希有なのかもしれない。自分自身，何かしらの価値観をもっていても，それは筆者が述べているようにたいていは無意識のもので，あらためて「自分はなに主義か？」と問う機会自体，今となっては滅多にない。誰かの家で夜通し語るにしても，政治やら思想の話は忌避されてしまうこの何年かの風潮からいっても，それはあきらかだろう。「お前はプチブル反動主義者だ！」「なんだと，スターリン主義者め！」と応酬するなかでみずからの主張を形成していく，そんな時代はもう終わったとするなら，本書のような判別表に頼る以外，自分はなに主義の持ち主であるかを自覚することはできないということなのかもしれない。さらに本書での特筆すべき事項をあげるとするなら，主義を観念的なものとしてではなく，生活実践に根ざしたものとして捉えている点だろう。「私たちの考え方（意識＝上部構造）は，既存の社会環境（とくに経済関係＝下部構造）によって規定されている」（本書，22頁）。判別表での質問事項が，「家庭内の封建道徳は個人の私的自由として認めるのか？」「内部告発者は救済すべきか？」というような日常的な具体的問題として提示されるのは，そういう前提があるからであると考えられる。「帝国主義は張り子の虎か？」という大それた問題との関連で主義を考えるということは筆者の立場からすれば空論でしかないのだろう。

このような，日常的実践をめぐる問題についての回答を組み合わせると，８個の主義のいずれかに該当するということだ。新保守主義，新自由主義，リベラリズム，（国家型 or 地域型）コミュニタリアニズム，リバタリアニズム，マルクス主義，平等主義。いずれもが，かつてのような対立図式にはおさまらない。だからこそ筆者はこれらを多様な価値観とみなすのである。その間にいかなる対立が生じ得るかは二の次の問題で，まずは，こういった多様な価値観のうちいかなる価値観を自分が持っているかを知ることのほうが重要である，ということなのだろう。それゆえに筆者は第二章で，以上の八類型について比較的つっこんだ説明を加え，のみならずそれらを比較し，相違点の明確化をこころみている。たんに主義の内容を紹介するだけでなく，各々が

どういう歴史的過程をたどって形成されたかを概観している。具体的な固有名，文献もあがっている。自分の主義が何であるかを示唆されたあとに読むと親近感が湧いて面白いかもしれない。

ただし，筆者にあって問題なのは「なに主義か？」を知ることであって，それがどのような実践的効果をもたらすのか，他のさまざまな主義とどういう対立構図にあるのかが説明されることはない。この本を読む限りでは，たとえば非正規雇用の増加，貧困の激化といった現状がじつのところは新自由主義と新保守主義が結合した実践によってもたらされているのかもしれないという問題意識を抱くことはないだろう。たとえ「あなたは新自由主義者ですよ」ということになっても，その人は，「せいぜいさまざまな価値観の一つとしてのなんとか主義を持っているだけのことである」ことでしかない。筆者はいずれの主義に対しても好意的だ。それゆえに，これを批判する，たとえば反グローバル主義やアナーキズムといった主義もあるということは問題にならないし，だからこそ，どんな価値観をもっていても「それでいいのだ」と肯定してしまう。

だからといって，対立が生じうることについて，筆者は無視しているわけでもない。それは次の文章に示されている。「複雑な社会においては，人々の価値観が多様化するのは避け難い事実であって，私たちは，自らの倫理的指針と多数派の社会的指針が乖離することに，慣れる必要があるだろう」（本書，107頁）。自分と多数派との乖離。ここから対立が生じるのだが，筆者はせいぜい「慣れる必要がある」というだけで，この対立において何をなすべきかは言わない。のみならず，自分と社会の乖離の問題が，どういうわけか「自分の倫理的指針」と「社会に対する倫理的要請」の乖離の問題（「自分の生き方の指針としてはリバタリアニズムを採用し，実際に他人とやっかいな社会的関係が生じる公的な場面では，国家型コミュニタリアニズムの指針に順応する，といった具合である」（本書，108頁））にすりかえられてしまう。つまり，自分が腹の底で抱いている価値観と，対外的な表向きの価値観との乖離の問題に，である。裏と表の使い分けということだろうか。これでは，自分と他者の乖離というより，裏の自分と表の自分の乖離ということになってしまう。本音では新自由主義万歳でも，表向きは，平等主義者として擬装する，というように。たしかにこういう乖離現象も，問題といえば問題である。とりわけ，いまだに解明されたとはいいがたい「転向」という大問題を抱えたままの日本においては。だがこれは，新自由主義と平等主義をそれぞれに信奉する二人のあいだでの乖離という問題とは別のことである。同じ教室の隣に座っている人の間でそういう乖離が生じているのだとしたら，その人同士，いったいどういう関係性をつくったらよいのか，どのような交渉がそこにはありうるのか。ひょっとしたら，これは乖離というだけでは済まない，いわば敵対関係なのではないか。

じつのところ，「政治的なもの」が生じるとしたら，まさにこういう乖離や対立においてであろう。だがこれは，「あなたはなに主義？」かを問題化する本書の趣旨からすれば，それこそ「乖離した」問題設定であるのかもしれない。

第3部　社会学の立場から

村澤真保呂

はじめに

今回，龍谷大学経済学部学会において橋本努氏の新著『経済倫理――あなたはなに主義？』の書評会に参加し，経済学専攻の研究者諸氏からさまざまな刺激を受けることができた。社会学と経済学は，かつて「思想」が意味をもった時代には密接な関係にあったはずなのだが，アカデミズムにおいて制度化され，細分化していくにつれて（つまり「科学」になっていくにつれて）それぞれ独自の領域を発達させていったこともあり，両者の関係はあまり親しいとはいえなくなった。とりわけ社会主義の崩壊と新自由主義の台頭が始まった後の経済学の華々しい発展にくらべると，現在の社会学は非正規雇用やニートなどの問題をつうじて市場社会化に抵抗するだけで精一杯であり，いまひとつ生彩に乏しいように思われる。市場社会化を推し進めている張本人とおぼしき経済学を，多くの社会学者は苦々しく眺めているのではないだろうか。

実のところ私自身も本書を読むまで，経済学と社会学の関係をあまり深く考える機会がないまま，むしろ両学問を対立するものと漠然と思っていた節がある。しかし，本書と書評会における議論をつうじて，経済学の領域の幅広さだけでなく，経済思想の懐の深さに触れることができたことは，私にとってきわめて有益であった。とくに書評会でのアンケートの結果は大きな驚きであったと同時に，さまざまな考察に道を開いてくれるきっかけとなった。

この書評では，社会学あるいは社会思想の立場から，本書について若干の考察を加えることが課されている。そのために，まず書評会において私を驚かせたアンケート結果を紹介し，本書の意図にしたがって私自身のイデオロギー的立場の相対化を試みたうえで，本書の内容について考えるところを述べることにしたい。

1. 利益と道徳

書評会では，著者である橋本氏自身が本書の趣旨を解説したうえで，八つのイデオロギー的立場を分類するためのアンケート調査が聴講者と参加者の全員に配布され，最後にその結果が集約され，発表された。アンケートの内容の詳細については本書ならびに小峯氏の書評に譲るとして，発表された結果で驚かされたのは，聴講者の多数が「リベラリズム（福祉国家型）」に分類され，「地域主義型コミュニタリアニズム」に分類されたのが私以外に一人しかいなかったことである[12)]。

12)　正確には，私の結果は「分類なし（Y－X－Y－X）」だったのだが，シンポジストとして自分のイデオロギーを聴講者に示す必要に迫られ，内容からみてもっとも近い「地域主義型コミュニタリアニズム」に選びなおした次第である。

橋本氏の分類において，「リベラリズム」と「地域主義型コミュニタリアニズム」はまったく正反対の主張から成り立っている。いいかえれば，両者に分類された人たちは，それぞれアンケートのあらゆる項目において正反対の回答を選んだことになる。そして私自身は，曲がりなりにも一社会学徒として標準的な回答を選んだつもりであったが，その結果として聴衆の学生および教員の大多数と正反対のマイノリティの立場に置かれたことは，私自身の立場を相対化するよい契機となった。

私がもっとも興味を抱いたのは，アンケートの最初の設問項目Aである「利益」と「道徳」の二者択一である。もう少し詳しくいえば「企業の経済活動は既存の道徳に縛られる必要がない（あるいは経済活動は既存の道徳を創造的に破壊する）」と考えるか，それとも「経済活動は道徳の中に埋め込まれるべきだ」と考えるかの二者択一である。ここで「利益」を選ぶと，新自由主義，リベラリズム，リバタリアニズム，マルクス主義，平等主義のどれかに位置づけられる。他方で「道徳」を選ぶと新保守主義，国家型コミュニタリアニズム，地域型コミュニタリアニズムに位置づけられる。この項目 A は，社会学の依拠するイデオロギーを考えるにあたってきわめて都合がよい。

多くの社会学者は，さらに多くのマスコミ人も，企業は社会集団の一種であり，全体社会を構成する要素であるから，企業が一般的な社会道徳に縛られるのは当然だと考えるだろう。反対に，企業活動による社会秩序の創造的破壊――たとえば新たなサービス業の登場による家庭の役割分担の崩壊，工場労働の普及による都市化と農村の崩壊など――については，一種の「アノミー（無規範状態）」を引き起こす要因であるとみなし，警戒するだろう。実際，社会学が問題とする「社会問題」の多くは，既存の社会秩序の崩壊を示す現象である。その意味では，社会学はそもそも共同体主義的あるいは保守的なイデオロギーにもとづいている。したがって，「企業の唯一の目的は株主の利益を最大化することであり，それ以外の社会的責任を引き受ける必要はない」というフリードマンのような考え方は，社会学者にとってはきわめて馴染みにくいか，あるいは現実離れした前提だと受け止められるだろう。むしろ社会学者にとっては，ポランニーのような「経済は道徳の中に埋め込まれているべきだ」という考え方のほうが受け容れやすいはずである。しかし反対に，多くの経済学者にとっては，ポランニーのような社会学的観点のほうが現実離れしているか，あるいは頑迷で前近代的なものと映ることだろう。

アンケートの項目については他にも興味深い点がいくつもあったのだが，ここでは「利益と道徳」という橋本氏の設定する対立に絞って，どうして社会学のイデオロギー的前提が経済学の立つ前提と異なってしまうのか（正確には，どうして私が地域主義的コミュニタリアニズムに分類されたのか）を，もう少し考えてみたい。

2. 社会学のイデオロギー的前提――フランス社会学を例として

ここで社会学のイデオロギー的側面を整理するにあたり，社会学の成立過程において形成され

た① 共同体主義，② 反－心理学，③ 反－社会進化論，④ 反－経済学，という四つの点について示したい。ここでは，とくに社会学が体系化されたフランスにおける社会学の形成過程に着目して，現代の社会学とのつながりをみていくことにする。

(1) 共同体主義

「社会学の祖」と呼ばれるオーギュスト・コント（1798-1857）は，フランス革命後の政治的混乱のなかで，処女作である『社会再組織のためのプラン』（1822）を発表した。そこで彼が宗教や形而上学に代わる新しい社会秩序の原理として主張したのが「実証主義」であり，後に社会学と彼が呼ぶことになる学問であった。現在からみれば，コントのいう社会学は，当時まだ根強く残っていた王党派やカトリック勢力に対抗するとともに，啓蒙思想の影響を受けた極端な理想主義（空想的社会主義など）を廃しつつ，産業社会の到来に即したブルジョア社会体制の完成を目指したイデオロギーであった。それでもコントが，前近代的な宗教的道徳が利己的人間像を前提としていることを批判したうえで，新たな近代社会の道徳は分業によって相互依存しあう人間像を前提にすることを主張し，実証主義あるいは社会学をつうじて公共の福祉を追求することが個人の幸福につながると説いた。

現代の社会学の方法論と対象は，コントの時代のそれにくらべると大きく変わってしまったと一般には思われている。それでも社会学には現在もなお，コントの思想の刻印が消えないままである。すなわち，社会学が対象とするのは相互依存しあう人間たちであり，いいかえれば「共同体」であって個人ではない，という思想である。コントから一世紀後に活躍し，現代の社会学の方向性に決定的な影響を及ぼしたデュルケムは，社会を諸個人に分解することのできない「一種独特なもの *sui generis*」であると主張し，方法論的集合主義を唱えた。また，デュルケムと同時代に対立して心理学主義を唱えたことで知られるタルドも，個人を超越する実在として社会を捉えようとするデュルケムを批判しつつも，個人を徹頭徹尾社会的存在と捉える点では意見が一致していた。そしてデュルケムは国家による社会的連帯の創設を支持し，タルドは協同組合運動を支持するなど，個人の利害を超えた相互扶助にもとづく共同体を志向する点でも変わらなかった。このような志向は，自立・独立した人間のあり方ではなく，相互依存しあう人間たちのあり方を学問的前提としていることに由来しており，その点は現代の社会学においてもほぼ変わらない。

(2) 反－心理学

このような共同体主義的なベクトルを最初からそなえていた社会学が，ヨーロッパの大学世界で発展していく過程において，個人を単位として扱う個人心理学と衝突することは避けられなかった。イギリス経験論の連合主義的な観点，すなわち全体を個々の要素の総和とみなす考え方は，そのまま社会を個人の総和とみなす考え方に結びつく。そうであれば，社会現象は個人現象の総和であり，その最終的な説明は個人心理学の役割であることになる。それにたいして（とくにデュルケムの）社会学は，個人を超えた抽象的実在として社会を定義することによって，社会学の領域から個人心理学を排斥することに力を入れ，個人にたいして外部から拘束的に作用する「権力」や「集合表象」の働きを分析することに執着するようになった。このような個人心理学

にたいする距離の取り方は，個人間の相互作用について研究を進めた戦後アメリカ社会学においても，ある程度まで維持されている。

(3) 反－社会進化論

一九世紀末に姿を整えつつあった社会学は，おのれの学問的アイデンティティを確保するために，心理学だけでなく，生物学とも対決しなければならなかった。社会学が決別した当時の生物学的潮流には，大きく分けて二つの種類がある。それは，ひとつめはロンブローゾに代表される生来的傾向説であり，ふたつめはエスピナスに代表される動物社会学の流れである。

ひとつめの生来的傾向説というのは，ロンブローゾにおいては生来的犯罪者説として展開された。つまり，犯罪という社会現象を起こす個人は，遺伝によって生来的に犯罪を犯すように定められている，という考え方である。このように社会現象の原因を生物学的レベルに求める考え方は，個人心理学のばあいと同じように，社会的次元の独自性を無視しているとして排斥された。またふたつめの動物社会学の流れは，動物を人間と同じような存在とみなす一種の「擬人化」であるとして，これも排斥された。

これに関連して，経済学と社会学の関係を考えるうえで重要なのは，ダーウィンの影響を受けた社会進化論との関係であろう。コントが歴史の三段階発展説を唱えて以来，社会学にも一種の進歩史観が刻み込まれていることはたしかである。しかし，社会進化論がダーウィンの生物学の影響を強く受けていた点で，生物学との決別を必要とするフランス社会学にとって，スペンサー流の社会進化論はそのまま受け容れることができないものであった。また理論的にもイギリスの社会進化論は連合主義の思想，つまり社会全体を個人の単純な総和とみなす前提を受け継いでおり，社会的領域を個人的領域に優越するものとみなすフランス社会学のあり方とは異質なものであった。さらに，個人間の経済競争を生物における生存競争になぞらえる社会進化論は，資本主義的な世界観を支持するものであり，先に述べた共同体主義的（さらにいえば社会主義的）なフランス社会学の方向性とも矛盾するものであった。

以上のようなフランス社会学のイデオロギーは，現代の社会学においても支配的イデオロギーとして継承されているが，社会学のイデオロギー的特徴はここで挙げたもの以外にも多くある。しかし以上に述べた特徴だけでも，一般的な経済学とのイデオロギー的前提の違いは十分に示されるだろう（もちろん社会学にもさまざまな流れがあるので，この特徴を社会学全体に一般化して当てはめることはできない）。まず経済学的な利己的個人像は，社会学的な共同体主義的な観点における個人像とはかなり異質であり，また，それは社会学よりも個人心理学に親和的である。さらに，経済学においてはシュンペーターにおけるように「創造的破壊」が社会進歩の原動力とみなされ，社会進化論に親和的な傾向が見られるのにたいして，社会学は社会進歩（あるいは社会進化）を積極的に評価する傾向を欠いており，経済的な意味での「創造的破壊」は既存の社会秩序の崩壊と結びつけて論じられることが多い。その点では，社会学は経済学よりも政治的に保守的な傾向をそなえている。いずれにしても私が地域主義的コミュニタリアニズムに分類されるにあたり，そのもっとも重要な原因と思われる「利益」と「道徳」の二者択一で私が「道徳」を

選ぶことになるのは，上記のような社会学のイデオロギー的前提にもとづいている。

3. 経済倫理と社会学

さて，上述の内容から私自身の立場はある程度まで明らかにされたと思われるので，次に本書の内容について私自身の考えを述べてみたい。

(1) 応用倫理としての経済倫理

本書の目的は，「『市場社会』は全体として，倫理的にどのように評価されるべきだろうか」という問題にたいして，「私たちのふだんの『倫理感覚』から出発して」，「一貫した答えを与え」る道を探ることにある（9頁）。しかし，ここで「市場社会」と呼ばれているものの内容は，企業の人事から国家の経済政策まで，きわめて広範な経済現象が意味されており，曖昧である。しかも，そのような広範な経済現象は，抽象的で複雑怪奇なメカニズムや種々雑多な政策によって作動しており，その原理は個人の日常的な生活世界の倫理感覚の延長線にあるものではない。たとえば，家族生活のなかで能力主義や業績主義の論理にもとづいて食事を分配しようとする者は，おそらくほとんどいないだろう。むしろ，家族生活においては老人や子供などの弱者のほうが優先的に食事を分配されるだろう。しかし，企業活動などの経済活動は，そのような生活世界の倫理とは別の倫理によって動いている。実際，市場社会には生活世界の倫理感覚からすると否定されるべきとまでは言わないまでも，きわめて異質な側面がある。

ここで著者が「倫理」と「信条」「願望」を切り離すことを主張していることは，とても興味深い。つまり，「倫理の問題とは，自分はさておき，社会のなかで他の人々がどのように振る舞うべきか，に関する問題である」と定義して，「自分はどのように振る舞うべきか」に関する行為の当事者としての「信条」や，「人々を強制したり……（略）……せずに，社会が自生的に善い方向に向かってほしい」と望む「願望」から区別するのである（58頁）。おそらくこの区別を設けなければ，読者は自分の日常的な倫理感覚から出発して，抽象的な市場社会について評価を下すことは難しくなるだろう。しかしこの区別は，ひいき目にみても技巧的あるいは操作的であり，倫理という用語の内容を意図的に狭めているように思われる。というのも，倫理は一般的な秩序にかかわるものであり，その点では個人的な信条や願望とは区別されるものではあるが，反対に個人の信条や願望のほうも多くのばあい一般社会のさまざまな倫理を内面化したものである以上，現実の生活世界においては，倫理と個人的な信条や願望を切り離すことは難しいと思われるからである。むしろ信条や願望から成り立っていない倫理のほうが考えにくい。

ところでふつうに考えれば，倫理という概念は，人間社会における道徳と同じような意味で用いられており，したがって経済倫理という概念は，人間社会の秩序，すなわち道徳に沿った経済のあり方を意味するものと考えられる。したがって著者が最初に指摘するように，経済倫理（学）において「市場経済を倫理的に包括するというコミュニタリアニズムの考え方が主流であった」（12頁）ことは自然なことである（そして，先に述べたように私自身もそのような観点を共有している）。

たしかにこのような観点は，必然的にマルクス主義やリバタリアニズムなど，他のさまざまな経済思想を最初から否定しており，硬直した考え方に結びつきやすい。著者が，先に述べたように「倫理」を「信念」や「願望」から切り離し，倫理という言葉の意味から当事者性を削り取るのも，経済倫理をコミュニタリアニズム的な狭い枠組みから解放し，より広い枠組みのなかで考察することを意図しているからであろう。そのことは同時に，経済倫理という領域を生活世界の倫理，つまり先ほど述べたような個人的な信条や願望と結びついた倫理の領域から切り離すことにつながるように思われる[13)]。

なぜ私がこのような疑問を抱くかといえば，この問題は経済倫理にかぎらず，医療倫理や環境倫理の領域においても指摘することができるだけでなく，倫理学における一種のアポリアとなっているからである。たとえば臓器移植は，日常的な生活世界の倫理にしたがう人々の「まだ心臓が動いている者から内臓を取り出す」という拒絶感情に直面しつづけている。この対立は，生活世界の倫理がいわゆる「自然（あるいは人間的自然）」と結びついたものであり，生老病死の問題がテクノロジーの発達にともなって「自然」から離れていくことによって，また，その結果として生まれた医療倫理という専門的な新しい倫理が生活世界の倫理から切り離されることによって生じたと考えられる。そして新たに生まれた専門的な倫理領域は，リスクや効率性，科学的合理性，政治的妥当性など，新しい観点と価値観を導入することによって，ますます専門外の人々にとって理解しにくいものになる傾向にある。おそらく経済倫理もこれと同じように，近代の経済領域における技術や制度の著しい発展にともなって，生活世界の倫理とは別の，いわば専門的な新しい倫理として要請されるようになったのだろう。

しかし，そうした新しい倫理領域は，生活世界の倫理とは完全に切り離されるものだろうか？それとも，そうした新しい倫理領域は，旧来の倫理領域の上位に置かれるべきなのだろうか？さらに，それらの新しい倫理領域のそれぞれもまた，専門領域として互いに切り離され，高度の自律性をそなえた特殊な倫理なのだろうか？　もしそうであれば，われわれは日常的な倫理とは別に，医療や経済，環境，社会，政治のそれぞれの領域ごとに異なる倫理を受け容れなければならないのだろうか？　最後に，それらの各領域は，さらに細分化され，それもまた個別の倫理となるべきものなのだろうか？

土橋（2001）は，ここで私が述べたのと同じ問題を，現在の倫理学が直面する危機的問題のひとつとして考察し，倫理学者として次のように述べている。

> 「今まで見てきた応用倫理的なものは，個別領域というものには基本的には絶対的な価値は存在しない，あくまでもその現場現場で相対的な解決法を見出していくといった立場でした。

13) 他方で，著者自身は「イデオロギーは生活環境に依存する」ことを強調しており，さまざまな経済倫理と生活世界の倫理の結びつきを認めている。したがって，ここで私が提起した懸念は，私が著者の論理をよく理解していないことに由来するのだろう。おそらくその誤解は，著者が「経済倫理学のあり方」を語ろうとしているのに，私が「経済倫理のあり方」を問題にしてしまうことに原因があるように思われる。

しかし……（略）……普遍的な価値，客観的な尺度といったものを人間は果たして本当に失ってしまったのかどうか，その問いを改めて問い直さねばならない，そう主張する思想家たちが一方にいます。彼らは例えば，そもそも人間は何のために生きるのかという目的論の問題を今でも有効な問題設定として掲げます。ローカリティーに立つということは確かですが，しかしそれらをひっくるめて「人間性」という普遍性は果たしてないのか，そして形而上学は神と共に滅びてしまったのか，こういった問題提起は今もってなされている，否むしろ今こそ激しく求められているともいえます[14)]」

(2) 基礎的な倫理としての経済倫理

さて以上では，経済倫理が一般的な生活世界の倫理（社会倫理）から離れ，一種の専門倫理あるいは応用倫理となることへの疑問と懸念について述べた。たしかに，こうした細分化と専門化は，倫理学の領域にかぎらず，あらゆる学問領域において，ずっと以前から起こっていることである。それは，science という語がそもそも専門分化した学を指す言葉として「科学」と訳されたことを考えてみてもわかるとおりである。しかし，倫理の領域は「善」や「美」という価値にかかわるものであり，単純に科学の領域と同じように考えられるものではない。そして，あらゆる応用倫理がそもそもは一般的な生活世界の倫理から出発し，それを補完するために要請されたものである以上，経済倫理もまた一般的な生活世界の倫理とつながるものでなければならない。

マルクスを持ち出すまでもなく，一般に社会的領域は，経済的領域の上部構造であると考えられている。われわれが家族生活を営んだり近隣の人々と共同体を形成したりすることができるのも，それを支える物質的・経済的な基盤があるからである。それはたしかにそのとおりなのだが，他方で，経済的領域が成り立つためにはあらかじめ社会的領域が存在しなければならないという，それと反対の側面もある。われわれが就職活動をしたり，労働したり，財貨を交換したりするときに，その相手として存在しているのは，まったく言葉のつうじない外国人や信頼できるかどうかわからない未知の人物でもなければ，まして何もかもが異質な宇宙人なのでもない。その相手は，われわれにとって意思疎通を図ることができ，一定の信頼を抱くことができる人物である。つまり，経済的領域の下部構造として，経済活動を支える社会的領域が存在している。この領域は，先ほどの経済的領域の上部構造にある社会的領域とは異なり，むしろ「原社会的領域」と呼ぶべきものであろう。そして，たとえばモースやバタイユ，近年では中沢新一の考察における「贈与」あるいは「相互給付」は，そのような「原社会的領域」における経済活動の一種である。というより，それは社会的領域と経済的領域が区別されない場所である。そうであれば，そこでの「経済倫理」は，応用倫理の一種としての「市場社会の経済倫理」とは異なり，生活世界の倫理の基礎となるような，社会的であると同時に経済的でもあるような倫理であろう。しかし，そのような基礎的な社会倫理であり経済倫理であるものは，そもそもコミュニタリアニズム的で

14)　土橋茂樹「今，倫理学に何が求められているのか」（『人文研紀要』第41号，中央大学人文科学研究所，2001年）.

あって，自由主義の経済倫理や社会主義の経済倫理とはまったく異質なものなのだろうか？

いや，そうとも限らないだろう。そもそもアダム・スミスにしても自由主義経済の基盤として「共感」という基礎的な社会倫理を前提としていたし，社会主義（福祉国家）にしても「弱者救済」や「平等」という基礎的な社会倫理を前提としている。さまざまなイデオロギーあるいは経済倫理の基礎には，近代になって発明された新しい倫理だけでなく，それ以前の古い時代の社会から継承されている倫理がある。そして，私のように「地域主義的コミュニタリアニズム」に分類されるような社会学者が，経済倫理あるいは経済思想と対話することができるとしたら，そのような基礎的な倫理の領域においてである。そして，社会学者にとって必要なのは，まさにそのような領域における経済学者との対話であろう。たとえ社会学者が，既存の社会が市場という経済的な力によって基盤が掘り崩されていることについて，資本主義経済とそれを支える経済学者に恨みを募らせるにしても，経済的イデオロギーの基礎にある倫理がそもそも社会的なものであるとしたら，その次元までさかのぼって問題を考察することは，社会学者にとってみずからの研究対象である社会的領域――近年になってますます経済的領域によって侵食されていると嘆かれている――を取り戻すために，残された唯一の道ではないだろうか。

いずれにしても，本書を読むことが，私自身の属している社会学という学問のイデオロギーを相対化し，さまざまな経済思想とのあいだの関係を考えるきっかけを与えてくれたことは，私にとって予想外の喜びであった。本書の「自分の考え方を相対化し，境遇の異なる他者との共存関係を探る」（22頁）という趣旨は，私にかんしては完全に成功したように思われる。

（受付　2009年１月19日）